今和次郎展における服飾立体模型制作

Costume Model for Special Exhibition of Wajiro KON

先川　直子
（Naoko SAKIKAWA）

Ⅰ．はじめに

今和次郎（1888-1973）は青森県弘前市に生まれ、1912（明治45）年に東京美術学校図按科を卒業して早稲田大学理工科建築学科助手となり、1956（昭和34）年３月に定年退職するまで、早稲田大学においてデッサンや建築関連科目を担当した。が、大正から昭和にかけて専門の建築学以外にも、幅広い分野に足跡を残し、多くの著書を残している。特に、「50年、100年後のために残しておけば助かる。目の前にいる人々の生活や風俗の記録を克明にやってみよう、と始めた。」[1)]「考現学」という学問の創始者として知られ、様々な事柄についての詳細な観察結果のデータを残している。その中でも、大正末期の銀座での通行人に関する詳細な調査結果は極めて有名で、後世の多くの論文や書物にも、その結果はしばしば引用されている。私自身も日本生活学会の『生活学事典』の分担執筆の折には、それらのデータを使用させてもらい、参考文献として彼の著書をあげたことがあった。[2)]

そのような今和次郎についての特別展「今和次郎　採集講義」がパナソニック電工汐留ミュージアム（現　パナソニック汐留ミュージアム）において読売新聞東京本社との共催の形で企画され、2011年10月29日から12月11日まで、今和次郎の生誕の地である青森の青森県立美術館、2012年１月14日から３月25日まで東京・港区のパナソニック電工汐留ミュージアムで開催され、さらに当初の予定にはなかったことだが、2012年４月26日から６月19日まで大阪・吹田市の国立民族学博物館において民博所蔵の考現学的な調査記録と資料を加えて「今和次郎採集講義―考現学の今」とのサブタイトルが付いた特別展として追加開催された。[3)]

企画の段階で、考現学の代表的な例である1925年の銀座における通行人の服装調査についてまとめた、その著書『考現学』[4)] の「1925年初夏　東京銀座街風俗記録」冒頭の「あいさつ」の中に掲載されている今和次郎直筆の挿絵である「風俗記録インデックス（第一図　統計図索引）」が、この特別展のポスターやチラシの図柄として決定し、展示の目玉の一つとして、そのインデックスに現されている服装をした等身大のマネキン（立体模型）を作成する話が持ち込まれ、固辞出来ずに、仕方なく引き受けることになったのである。

特別展のための私が担当した復元作品の制作としては、これ以前に東京国立博物館の「更紗展」での「更紗小袖」[5)] があった。

これは東京国立博物館所蔵の古渡更紗を中心に行われた特別展であったが、この展示のため

に、アメリカのブルックリンミュージアムから更紗と思われる小袖を着ている女性が描かれている、江戸時代にわが国で制作された屏風が里帰りすることになっていた。恩師である日本女子大学教授の小笠原小枝先生が中心になっての企画展であったため、雑談の中で屏風の女性の小袖の話になった時に、「古渡更紗の裂が２枚あれば作れるはず・・・」とラフな製図をしてしまったことから、展示用に等身大でその更紗の小袖を作るという大仕事が回ってきたといういきさつがあった。その結果、屏風に描かれている女性の姿から小袖の身丈・袖丈・袖幅などの各部分の寸法を測り、その比率を忠実に再現した小袖を制作して、屏風の横に並べて展示したのである。

このようなこともあり、目白大学短期大学部生活科学科の専任になるまでは、比較的時間に余裕もあったので、他の機会にもあちこちの博物館や美術館に小笠原先生に同行したり、依頼を受けて収蔵品の調査鑑定する場に同席したりすることもあった。

このような中で、ミュージアムという贋物は一切認められない厳密さが要求される場での展示用に、イラストから等身大の服飾模型を生み出すことは、時代考証や衣服素材等のあらゆる点に関して、どのような専門家の視線にも耐えられるものでなければならないということは叩き込まれていた。

したがって、ことの重大さ・大変さを思うと気が重い仕事ではあった。しかし、やはり小笠原先生経由で持ち込まれた日本生活学会における事典編纂に当たっての、服飾関連部分の分担執筆で、様々な資料を使用してはいたが、日本生活学会と今和次郎の関係などまったく知らずに、メインの資料として今和次郎の著作を使用していたことも、何かの縁と、引き受けることにしたのである。

方法としては、彼の著作の中での記述とイラストを中心にするのは勿論のことだが、当時の新聞・雑誌・書籍・絵画資料等で、その男女の洋装と和装に対応するような銀座および東京の服装や流行等について詳細に記述してあるものや、写真・挿絵が多数掲載されているものを可能な限りたくさん集め、それらを補足資料とすることとした。

なお、パナソニック汐留ミュージアムによる制作のねらいは「今和次郎が描いた人体に関するグラフィックのうちもっともよく知られる代表作を、展示のハイライトとするため立体化を試みる。1925（大正14）年当時の急速に近代化していく東京・銀座の都市文化、風俗を、来訪者に身近に感じていただけるよう、近代服装史専門の専門家の意見および文献を参照し、史実に忠実に模型化しながら、同時に原画の魅力を伝える」[6] ことであった。

なお、東京国立博物館の場合と異なり、今回は実際の衣服制作は私の指示のもとに若手デザイナーの中園裕二氏が担当することになった。

Ⅱ．今和次郎の『考現学』と「東京銀座街風俗記録」

著書『考現学』に収録されている「東京銀座街風俗記録」は、1925（大正14）年５月７、９、11、16日に吉田健吉とともに実施した調査結果であり、西側と東側の人の出の比較や通

行人について男・女・学生・店員・労働者・子供・その他と区分した上で、その割合を表し、服装や化粧・髪型などについても、形・色柄から小物の種類・持ち方にいたるまで、非常に詳細に調べて、克明に記述するとともに、それぞれをパーセンテージを併記して図示しているのである。

その集大成ともいうべきものが「図一」として著書の冒頭に掲載されている「インデックス（統計図索引）」であり、これが前述のように特別展のポスター（図１）やチラシ、図録のカバーに採用されるとともに、展覧会の目玉企画の一つとして等身大で立体模型を制作することになったものである。

図１　「風俗記録インデックス」（「今和次郎　採集講義」展　ポスター）

制作依頼の時に、この展覧会の担当者であるパナソニック電工汐留ミュージアムの学芸員の大村理恵子氏から「インデックス仕様書」（表1）を受け取った。これは、今和次郎の「東京銀座街風俗記録」の中から、男女の洋装・和装について、最もパーセンテージの高かったものを一覧表にしたものであり、これに添った形で作成して欲しいとの依頼でもあった。

打ち合わせまでに、それに補足や説明を加えたものを準備し、以下のようなメールを送信した。

> 挿絵や写真等の資料を出来るだけお見せして説明した方がイメージが沸くかと思い、手元にある本の中から役に立ちそうなものを選んで付箋を貼っています。
>
> また、今回、気になった書籍を古書で購入しましたので、それも含めてお見せして納得してもらったほうが制作がスムーズにいくのではないかと思っています。
>
> 先日メールでいただいた資料に補足や書き込みを加えたものも、そのときに説明しながらお渡ししたほうが分かりやすいのではないかと考えています。
>
> 布の見本帳も準備しましたので・・・[7)]

この打ち合わせの時には、文末の参考文献に挙げている書籍をはじめとして、30冊以上の資料を用意し、担当学芸員、衣服制作者との三者でイメージの共有化を図った。打ち合わせの後で、担当学芸員から次のようなメールを受信した。

> 貴重な資料をたくさん見せていただきコピーまで用意していただき、感謝しております。

表1　インデックス仕様書　捕足・説明

男の服装（洋装は67％）

アイテム名	統計図番号	今の記述	補足・説明
スーツ	第8図	色は霜降り、三つ揃い。パンツの裾はダブル。	色はグレー
外套	第9、10図	スプリングコート。色はうぐいす色。	これはレインコートの表示
シャツの襟	第11図	ソフトカラー。	
ネクタイ	第12図	通常のネクタイ。ピンなし。	
懐中時計	第13図	「男の胸の飾りとして重要。」鎖は金の太い鎖のもの。チョッキのボタン穴の何段目かを通して両方のポケットに納めるかけかたがこの頃の流行。	
手袋	第14図	素手が95％と記述しているが、図中では手袋を着用した姿で描いている。クリーム色かねずみ色。	
靴	第15、16図	赤みがかった茶色の編み上げ	
羽織	第16、17図	中柄の絣。	羽織・着物共に縞が幾分多い
着物	第16、17図	こちらも中柄の絣が統計的には一番多いが、羽織とかぶるので次に多い小柄の縞を採用してはいかがか。	OK
足袋	第19図	黒足袋	
履物	第20図	一般的な下駄	
ヒゲ	第21図	刈り込んで口の上いっぱいの幅のものが何と言っても中年の紳士の標型。英国紳士型。なかでもチャップリン型が全盛。ひげのない人が69％を占めていたと記述されているが、図ではひげをたくわえた様子で描かれている。	
メガネ	第22図	金縁	
帽子	第23,24図	茶褐色、ラシャのソフト帽。きちんと中折りにしてかぶる。	中折れ帽やソフト帽が目立つ
携帯品	第25図	風呂敷が多数との記述だが、図中では本を右手に、ステッキを左手に持っている。	
たばこ	第26図	パイプにタバコを差し込みくわえている。	

女の服装（何度か調査した結果いつも女性の洋装は1％と出たが、この日はなぜか10％だったらしい）普段着ではなく、外出着が9割

アイテム名	統計図番号	今の記述	補足・説明
羽織	第27、29、30、32図	柄は友仙大柄。生地は銘仙が一般的。	図では友禅でなく縞　友禅は染めだが、銘仙は織が一般的。解し織による模様友禅のことではないかと思う。
着物	第29、30図	着物は羽織より一段ずつ地味。中柄（1寸５分）の縞。銘仙。着物の模様は准和風が多い。准和風というのはクラシカルなものではない、和洋混合状のもの。襟元はあごを包むようにきっちり合わせる。	図では絣。たて縞のお召縮緬が流行日常着としては銘仙、モスリン、絣木綿
長襦袢			
帯	第35、26、37図	素材は羽二重が一位、メリンスが二位。帯色は黒か藤色で、和風（日本クラシックの鮮明なもの）が多数。	
帯留め	第38図	紐素材。金具の飾り	飾りなし　85％、飾り付　15％　なので、金属の飾りのないものか組み紐
半襟	第40図	赤無地	
スカーフ	第41図	あっさりしたものが多数。色はピンク。	スカーフというよりも、大判のショール型
足袋	第42図	白足袋	
履物	第43図	中歯の下駄？草履？	畳付きの駒下駄、吾妻下駄では？（ただし図では草履？）
洋服	第44、45図	統計上は角襟かショールカラー。図中では襟なし。裾はふくらはぎの半ば。	
帽子	第46図	鉢やふちの小さいもの。素材は布地。飾りつき	
靴下	第47図	黒色。ただし流行とは関係していないとのこと。	
靴	第48図	プレーンなもの	中ヒール程度の短靴
髪型	第49、50、51図	数のうえでは束髪が多い。束髪は仕上げ方で日本風にも洋風にもなる。	
櫛	第52図	セルロイドのものを後ろにつける	図では、かんざしを右側につけている
メガネ	第54図	統計上は94％はメガネなし。ただし図中ではメガネをかけている。金縁。不要かも。	洋装の方のみに
手袋	第56図	統計上は手袋をしていない人が多いが、図中ではしている。色は黒か水色が多数。	
バッグ	第57図	うり形の小さいもの。	夢二の書物中に作品の掲載あり
持ち物	第59図	数の上では風呂敷が多いが、図では小さい紙包みを提げている。	

仕事柄、資料集めが如何に大変なことかはよく存じていますので、先生がこれまでに集められた稀少な資料を一挙に拝見できてとてもありがたいです。

おかげさまでぐっと立体模型化の展望が見えてきました。

中園さんも必ずよいものを作ると張り切っています。私としても大変勉強になりました。

手提げの資料も探してくださってありがとうございました。[8)]

その後に、青森まで展示の打ち合わせに出張していた担当学芸員からは、「服飾模型は、たいへんユニークな試みと関係者の間でも期待が集まっています。」[9)] との連絡も入った。

Ⅲ．服飾模型

前記の方針でインデックスの服飾模型制作を開始したわけであり、出来る限り忠実に再現することを目指したのである。

我が国においては大量生産大量消費の生活様式に馴染む以前はモノを大切に使い、使い切ることが美徳とされており、花嫁道具として持参する何棹もの箪笥には一生着られるだけの和服がぎっしりと詰まっていた。そして、着物や帯などの和装品は時には「箪笥の肥やし」と皮肉られながらも、思い出とともに桐箪笥や蔵に保管され、戦中・戦後の生活困窮期さえも乗り越え、「一生もの」どころか母・子・孫と何代にもわたって受け継がれ着られていたのであった。そのため、幸いなことに、和装品に関しては、一般の市井の人々のものでも、まだ骨董品店や骨董市で古い時期のものを探し出すことができるのである。

しかし、洋装品は別であった。我が国への導入時には和装品と同様に数多くの古着屋があり広く出回っていたはずの、洋装用の年代ものの古着を扱う店は、現在ではほとんど探し出せないし、目まぐるしい流行の変化や体型の変化に対応できないことなどから、一生ものとしての価値も認識もなく、自宅で何代にもわたって長期間保管するなどという習慣も無いため、古いものを入手することは極めて困難であった。

そこで、可能な限り、骨董品店などで当時の染織品を入手すること、骨董品の入手が不可能な場合には、できるだけ当時の素材に近いものを使用し、形状は当時のままとすることを確認の上で、実際の制作に入ったのである。

その過程で三者の間で膨大なメールのやり取りがあり、日夜を問わずに質問のメールも来て、古着さがし以前に、制作のイメージを確立してもらうために、根拠となる資料を再度探すこともたびたびであったが、そのやり取りは割愛して、結果として出来上がったそれぞれの服飾に焦点を当てて、以下で詳しく述べてみたい。

１．男性　洋装

当時は洋服用のセルも出回っていたので、スーツとコートは、現在のサマーウールよりも少

し厚地で霜降り調の素材のものを使用することに決め、大正末期から昭和初期という訳にはいかなかったが、ヴィンテージショップで探した。しかし、イメージに合うものがなかなか見つからず、スリーピース、オーバーコート共に、生地から仕立てることも覚悟した。が、結局、現在のサマーウールより少し厚地のウール100％のチャコールグレーの三つボタンスーツと、スリーピースよりも少し濃い目のウール100％のコートを入手することが出来た。

洋装用の服飾小物に関しては、帽子は既製品をイメージに合うように帯の部分だけ変えて使用し、手袋は白いものを購入してグレーに染めて使用した。が、靴などは購入品がそのまま使用できた。

２．男性　和装

中柄の絣か縞の着物と羽織を探すことに決めて、知り合いの民芸品・骨董品の店で相談したり、他に『別冊太陽』の『昔きものを買いに行く』という本に載っている骨董の染織品を扱っている店や骨董市の一覧[10]を活用して探した。

なお、女性用：モスリン―男性用：セルという具合に、和装用毛織物でも性別により用いられ方が異なっており、モスリンよりもセルのほうが高価であること、および、ウールはモスリンやセルが廃れてから、戦後に出回ったものの可能性があることを、担当学芸員と制作者に教示し、男性用は銘仙よりもお召や紬の方が入手しやすいと予想できること、女性用を銘仙にするならば、男性用はそれより格の低い品にしない方が良いことから、素材については、紬で探すことに決定した。

その結果、いくつかの候補を見つけ出すことができ、その中で「縞の着物＋絣の羽織」のイメージに最も近いと思える、茶色の縞の着物に黒系の小絣の羽織に決めた。

その他の品についての決定に至る経緯は、以下の通りである。

当初の打ち合わせでは、帯は博多織の正絹の角帯と決めていたが、羽織、着物ともに濃色になるので、素材が絹か綿かには拘らずに、織と色合いとで決めた方が良いと方針を変更し、生成やベージュをベースに焦げ茶もしくは黒の博多献上と言われる織柄が入っているものを探すことにし、ベージュの色柄のものを購入した。

半襟は塩瀬の茶色のものを使用することにした。

持ち物の中でも重要な位置を占めているステッキについては、今和次郎の絵でも手の部分がストレートではないし、当時の男性にとって、重要なアクセサリーの一つでもあったはずなので、ステッキが数多く掲載されている当時の写真（図２）を参考として添付して示し、多少装飾のあるステッキを探し出して購入することにした。

最初にメールで写真が送信されて来たステッキは、装飾性は申し分ないが、今和次郎の図を忠実に再現するならば、手の握りの突き出た部分が目立ちすぎるため、もっとプレーンな今和次郎のドローイングに忠実なものを再度探すことにした。その結果、でっぱりのない犬の装飾のステッキ（図３）が見つかり、こちらの方がイメージに近いことと、時間的にこれ以上探す

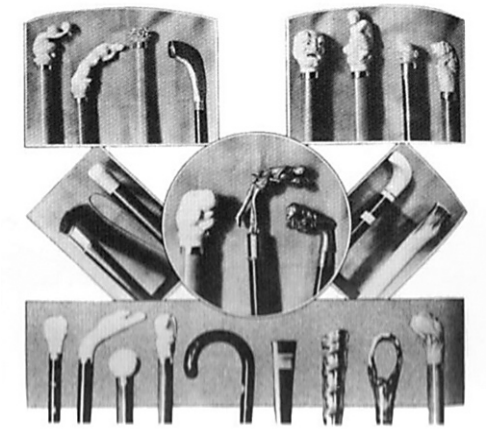

図2 「流行のステッキ」(『アサヒグラフ』大正14年3月11日号)

図3 犬の装飾のステッキ(購入品)

のが無理なことから、これに決定した。

3．女性　洋装

女性用の洋装については、本章の冒頭部分で示した理由により、イメージに近いものを古着で探し出すのは不可能と判断し、両者の了解のもとに、新しく制作することに決定して、以下の指示を出した。

ワンピースはポートネックで、素材はウールのサージのブルー系からネイビーブルー、または黒、ウエストの位置をかなり下げたローウエストのワンピースで、プリーツは1本だけにする。また、ローウエストの部分に組紐でなくワンピースと共布のタッセルのついたベルトを付ける。

この制作過程で、事前に渡していた写真資料や絵画資料だけでは、ローウエストのイメージがうまく伝わっておらず、試作品のウエスト位置が十分に下がっていなかったので、資生堂の「銀座風景」の洋装と和装の女性の部分(図4)と、白秋の詩の挿絵(昭和4年)のワンピース姿(図5)を参考資料として送り、再度制作してもらった。

なお、ベルトのタッセルについては、ベルトの装飾であることは分かるのだが、

> 本日、ずっと、当時の写真を探しているが、バックル付きと思われるベルトや共布で作った紐を結んで両端の余りを垂らしているのはそれなりにあったが、タッセルをつけたものを見つけることはできなかった。(したがって、どのようにつけているのかの参考にならない)[11)]

といった状態で、かなり苦労した。

図4　ワンピース姿（「銀座風景」資生堂　昭和２年）

図5　ワンピース姿（「北原白秋の詩　挿絵」 昭和４年）

図6　肖像写真（『婦人グラフ』大正14年）

靴下については、『婦人グラフ』大正14年の掲載写真から靴下のわかるもの（図６）を参考として使いながら、靴下自体がナイロンが登場した現在と比べて、かなり厚地だったように思うこと、今和次郎の統計を見ても圧倒的に色は黒が多いことから、厚めの黒のものに決めた。

靴については、当時はやっと靴を履く女性が出現した段階なので、現在の感覚で言えばハイヒールではなく中ヒールかローヒールに近いものを履いている図像が多いように思い、大正14年の銀座のスナップと肖像写真（図６）、今和次郎の昭和２年の銀座のイラスト（図７）などを参考に、ローヒールに決めた。

帽子については、最初に担当学芸員からもらった一覧表の「文献に基づく考証」にあるように、《生地は服に合わせる》ことが多く、前記の資生堂の資料や靴下の写真でも共布であり、当時の多くの図像では、同じ色に着色されていた。

> 20～30年前までは、和装でも着物の余り布で草履とバッグを仕立てる職人が、まだ結構多くいて、着物を仕立てた残り布をどうするか仕立ての注文時に聞かれましたし、実際、私もお揃いの草履とバッグをお願いしたこともありました。
>
> 洋装でもそのようなことがあったのかもしれません。（これはあくまでも私の想像ですが）[12)]

このように、洋服自体が制服のようなもの以外に既製服はまだ存在せず、注文服だったため、帽子も一緒に作っている可能性があった。しかし、同じ素材で作るとなると、成型で帽子を作ることが出来ないが、今日では既製品の帽子でフェルト以外の素材のものを探すのも大変なのに、まして共布で作るということは、帽子の注文制作をする職人も減少しているだろうか

図7 「東京風俗図　銀座」（近和次郎・吉田鎌吉『朝日グラフ』昭和２年第４巻１号）

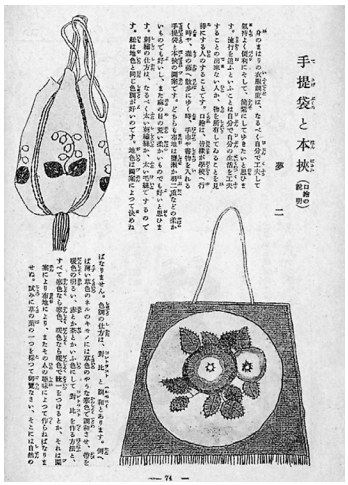

図８　瓜型袋物（竹久夢二『婦人グラフ』大正13年）

ら、時間的に考えても無理ではないかと判断し、先に帽子を決めて、ワンピースの生地を選ぶ時に、帽子に近い色の服にすることを提案した。

手袋については、制作者はサテンかベロア素材のものを考えていたので、５月なので黒のレースでと指示をして、再度銀座資生堂前の女性のイラスト（図４）を参考資料として送信した。

洋装の側の手に提げている瓜型の袋物については、最初の打ち合わせの時点で、竹久夢二の著書の中に似た物の挿絵（図８）を発見していたので、それを資料としてワンピースと共布での制作を依頼した。

４．女性　和装

女性用の和装に関しては、当時の流行色の藤色～パープル～えんじ色～ピンク系の色味の近いもので全体をシックにコーディネートすることにし、素材は絹のうちでも、銘仙に決めた。

まず、図９、図10のような竹久夢二や高畠華宵の女性を描いている絵の中から、全体のイメージをとらえ、着物には「足利銘仙」のポスター（図11）のような解しの技法が用いられている絵柄の銘仙を探し、候補として紫地の中柄絣、青紫地の中柄絣、青紫地の中柄矢絣とバラ、濃い紫地の絣と水玉の４種が見つかった。中でも、矢絣に解しで洋風のバラの模様が入った銘仙の着物は、大正モダンを代表するような図柄で、和洋混合状という趣旨にもふさわしいものであり、担当学芸員からも、銀座らしい印象があるとのお墨付きをもらった。しかし、こ

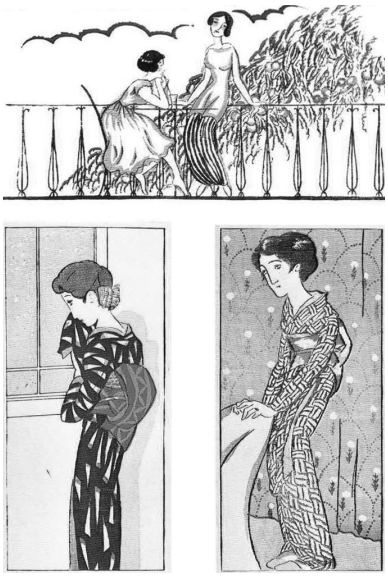

図9　洋装・和装の女性　（竹久夢二『婦人グラフ』大正13年）

図10　華宵好みの流行スタイル（高畠華宵『婦人世界』昭和4年）

図11　「足利本銘仙」ポスター（『別冊太陽銘仙』）

れに合う羽織の古着を探すことで苦戦して採用を断念し、羽織を先に決めて、その羽織に合う着物を後から選ぶことに方針を転換した。

また、小物類は、着物が派手な時には帯は落ち着いた色柄のものにするとか、半襟や帯揚げは着物の色よりも少し明るめを選ぶなど、着物と羽織が決まった段階で、それらとのコーディネートを考えて選ぶことにした。

羽織をエンジ系の縞の銘仙にすることに決定し、着物は、その羽織の縞の中にある色味のもので、５月ということもあるので、明るめの色のものを選ぶことにした。最終的には図12の組み合わせの、茶とエンジ系の縞の羽織と、ピンクに近い赤紫の地で絣に青い洋風のバラの模様の解し銘仙の着物を購入した。

女物の帯については、当時の図像資料を見ていると、無地以外はほとんどが総柄のように見えた。また、資生堂の昭和２年の街頭調査[13]によると、織ではなく染め模様の帯が多かったようである。今和次郎の調査結果[14]でも1位が羽二重、２位がメリンスと

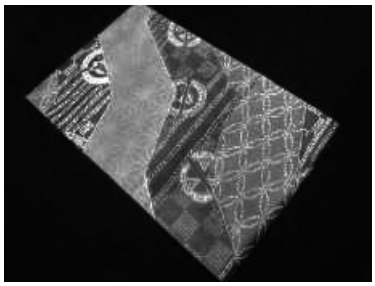

図12　女性　和装のコーディネート（購入品）

なっているが、当時はモスリンに友禅染を施したものが友禅メリンスとして流通していたので、両面が別素材の袋帯で、その一方が友禅メリンスであるメリンスの昼夜帯が多く用いられていたことと関連するのかもしれない。

そこで、染めの総柄のもので、クラシックな図柄でありながら５月の季節を感じる帯を、羽二重にこだわらずに、塩瀬等、他の素材まで広げて探すことにした。その結果、図12の帯を購入することに決定したのである。

図13　吾妻下駄（購入品）

半襟は、塩瀬がなければ、羽二重よりは縮緬を、ただし、年代物にこだわらなければ、現在売られている塩瀬の半襟（白がほとんど）を好みの色に染めて使うことも考えた。が、幸いにも薄いピンクの塩瀬のものが見つかった。

下駄は、畳付きの吾妻下駄に決めていたが、なかなか適当なものが見つからなかったため、当時であっても、外出用のよそ行きの履物としては、草履（ただし、佐賀錦などの盛装用でない草履）がよく履かれていたはずなので、畳付きの下駄がどうしても入手できない場合は、単なる下駄よりも草履の方がよいのではと、履物の写真を添付して提案した。最終的には畳付きの吾妻下駄（図13）を探し出して購入することができた。

ショールについては、薄手の絹の素材で大きめの物で、色は、１位ピンク、２位白　という今和次郎の調査結果を尊重しながら、色の濃淡や、着物と羽織に合わせた感じなどについて何度も検討し、色は少し薄めのピンクで、初夏の雰囲気を演出するのに良いと思われる品が、着物や羽織の色と合わせてみても大丈夫だったので購入した。

髪型については、大量に送った洋髪の写真資料や絵画資料をもとに制作者にイメージを膨らませてもらい、それに合うようなかつらを注文してもらった。図14は渡した髪型の資料の中から選んで、制作者がイメージを作るために使用したものである。

かんざしも髪型の資料の中に見出せるのだが、実際の製品の購入となると、これはと思った品が、金属部分を見ると日本髪用と思われ、洋髪には向かないなどの苦労があった。

インデックスで和装の手に下げている荷物については、制作者が若いデザイナーのため、なかなかイメージがわかないので、現在のような紙袋がなかったので、風呂敷を持参しない場合、包装して紐かけになること、紙は使い捨ての包装紙なので上等な和紙ではなく、安価な包装用の紙であり、紐も同様の理由から、安価な梱包用のものであること、ただし、ビニールやポリエチレン等はまだ出現していないので、麻紐か丈夫な紙の紐が良いことなどを、詳細に指示して、作成してもらった。

図14　洋髪各種

図15　服飾立体模型（展示用完成品）

Ⅳ．おわりに

今和次郎のインデックスを限りなく忠実に立体模型で再現することが私の使命であるとの思いで、可能な限り当時の資料を集め、パナソニック電工汐留ミュージアムの担当学芸員、及び衣服の実際の制作者と直接対面して、あるいはメールでの打ち合わせを重ねて、資料を送ってイメージを伝え、疑問に答えながらの服飾立体模型制作であった。１日に10回以上のメールのやり取りをすることも、深夜や明け方にメールのやり取りをすることも稀ではなかったが、夏季休暇中の作業であったため、制作者が徹夜での作業中に生じた疑問や質問にも、何とか時間を空けずに答えることができた。

男女の洋装・和装の合計４種類の服飾を作成したのであり、それぞれについては、ほぼ満足のいくものに仕上がっていった。しかし、完成品として、マネキンに着装してみると、個別に作成していた時には気づかなかった問題点が浮き彫りになったのである。

肩の張り方等、マネキンの体型と衣服との着装時の釣り合いの問題も出現したが、何よりも大きかったのは、今和次郎がインデックスにおいて男女２体の左右にそれぞれ洋装と和装をさせて描いているのを、立体模型においてもそのまま表現しようとしたことであった。紙の上での平面的な表現では問題にならないことだが、立体的な表現になった時に、左右の衣服のつなぎ方をどうするのかは大きな問題であった。

実際、洋装と和装とをつなぎ合わせた完成品において、男性用和装の着物の衿の位置がかなり高くなっていることが気になった。和服はゆったりと着付ける必要があり、今和次郎のイラストでも、ネクタイの結び目よりも下で、衿幅の下側はベストの位置よりも下で合わさっている。完成・合体後の修正であるため大変だとは思ったが、ダメ出しをした。制作者からは「す

べてドッキングされているため、どこまで再現できるかわからないが、やってみる。」との返信があり、衿のラインをかなり下方に直したのである。

女性の洋装の髪についても、帽子からサイドの毛の端が頬にかかる程度で、あとは帽子の外にあまり見えないはずなのに、下の部分のボリュームがあり過ぎではないかと気になった。が、これは帽子が今和次郎のイラストに描かれている物よりも少し浅めであったことと、右半分の和装の髪型がアップスタイルの洋髪で髪に膨らみがあることにより、帽子の向こう側に和装スタイルの洋髪の髪が見えてしまうことによるものであった。原因がどのようなものであれ、インデックスと同じ状態にする必要があるので、修正をしてもらった。その完成品が図15である。

このように、今回の服飾立体模型制作では、２次元の平面的に描かれているイラストを見て、３次元の立体的なものを作るという困難さだけでなく、せっかく完成させた４種類の服飾品にハサミを入れて、それぞれを半分にした後で、洋装と和装という形状も長さも異なる２種類の半身を真ん中ではぎ合せるという手法を取ったために、異質な２つのドッキングによる左右のバランスの悪さや不自然さなどの問題も生じたのである。

細かな点も含めると、後から「こうすればよかった！」と思った箇所は多々あるが、三者の協力と若い制作者の大いなる努力もあって、来館者が「絵と立体が同じ！」と納得できるものを作るという当初の目的は何とか達成できたのである。そして、予定になかった大阪府吹田市にある国立民族学博物館での展示が追加決定され、そのパンフレットやポスター等に、この服飾立体模型が掲載されることになったのも、博物館関係者にそれなりの評価を得たからであろうと思っている。

【注】

１）今和次郎『読売新聞』 1971年２月10日夕刊
２）先川直子（衣生活関連分野分担執筆）日本生活学会編『生活学事典』 ＴＢＳブリタニカ、1999年
３）パナソニック電工汐留ミュージアム「今和次郎　採集講義」展ポスター、チラシ、図録、2011年
　国立民族学博物館「今和次郎　採集講義・・・考現学の今」展ポスター、チラシ、2012年
４）今和次郎『モデルノロヂオ（考現学)』（復刻版） 学陽書房、1986年
５）先川直子『東京国立博物館　古渡更紗展　展示用復元更紗小袖制作』 1998年６月
６）大村理恵子（パナソニック電工　汐留ミュージアム）「インデックス模型仕様書」2011年７月19日
７）先川直子「大村理恵子氏宛メール」 2011年８月５日
８）大村理恵子「先川直子宛メール」 2011年８月８日
９）大村理恵子「先川直子宛メール」 2011年９月１日
10）『骨董をたのしむ47　昔きものを買いに行く』134頁～139頁、平凡社『別冊太陽』 2003年
11）先川直子「大村理恵子氏・中園裕二氏宛メール」 2011年９月７日
12）先川直子「大村理恵子氏・中園裕二氏宛メール」 2011年９月11日
13）資生堂意匠部編「統計に現はれた銀座」『御婦人手帳』119頁～126頁、資生堂、昭和２年
　（『コレクション・モダン都市文化　17巻　資生堂』ゆまに書房、2006年　収録）

14）今和次郎・吉田鎌吉「1925夏　東京銀座街風俗記録」『前掲書』、27頁

【参考文献】

1）遠藤武・石山彰『写真にみる日本洋装史』文化出版局、昭和55年
130頁～132頁　肖像写真　５枚
136頁～137頁　画　８枚　洋装
140頁～141頁　画　髪型・帽子
176頁　写真　パラソル・ステッキ・ネクタイ

2）日本近代史研究会編『画報　風俗史』 日本図書センター、2006年
998頁～999頁 「夢二と華宵―抒情のエスプリ」 画　６枚　女性の洋装・和装
1026頁～1027頁 「お父さんのお出かけ―大正の小市民家庭」 画　９枚
男性の洋装・和装、女性の和装
1042頁～1043頁 「活動写真から映画へ」 写真　７枚　男性の洋装・和装、女性の髪型

3）遠藤武・石山彰『図説　洋装百年史』 文化出版局、昭和37年
116頁　画　洋装、袋物
134頁　画　和装女性・洋装男性
岸田劉生　画 「東京新繁盛記」
142頁～143頁　写真 「街角に立てば―帽子のある風景」
帽子姿の男性　多数、女性帽子　６枚
画 「婦人流行帽子一覧」
（小池冨久「流行中心　丸ビル商店街での婦人帽子収集断片」『婦人グラフ』大正15年12月号　の再録）

4）サカツコーポレーション編『明治・大正・昭和　お酒の広告グラフィティ』 国書刊行会、平成18年

5）石川桂子・谷口朋子編『竹久夢二　大正モダン・デザインブック』 河出書房新社、2003年

6）竹久夢二美術館　石川桂子・谷口朋子編『竹久夢二のおしゃれ読本』 河出書房新社、2005年

7）弥生美術館　中村圭子編『昭和モダンキモノ　抒情画に学ぶ着こなし術』 河出書房新社、2005年

8）堀江あき子・谷口朋子編『こどもパラダイス　1920-30年代　絵雑誌に見るモダン・キッズらいふ』 河出書房新社、2005年

9）弥生美術館　内田静枝編『女學生手帖　大正・昭和　乙女らいふ』 河出書房新社、2005年

10）『竹久夢二』『別冊太陽№20』平凡社、1977年

11）松本品子編『高畠華宵　大正・昭和レトロビューティ』 河出書房新社、2004年

12）『昔きものの着こなし　モダンデザインを着る』『別冊太陽　骨董をたのしむ48』 平凡社、2003年

青木正美・西坂和行『東京下町100年のアーカイブス―明治・大正・昭和の写真記録―』 生活情報センター、2006年

13）和田桂子編『コレクション・モダン都市文化　第２巻　ファッション』 ゆまに書房、2004年

14）垂水千恵編『コレクション・モダン都市文化　第16巻　モダンガール』 ゆまに書房、2006年

15）和田博文編『コレクション・モダン都市文化　第17巻　資生堂』 ゆまに書房、2006年